

[002] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10265>

出版情報：語文研究. 2, 1955-05-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



○ こゝに語文研究第二号を送る。思えば昨年十二月四日例会の際発刊断行を決議してから五カ月ぶり、創刊号発行以来満四年ぶりである。色々な困難もあつたが、とにかく発行して御覽に供するといふ所である。

○ 最初の予定が二十九年度内という事であつた為、とりあえず集つた若い方々の原稿を主として掲載した。即ち巻頭の岡本庸子氏、つゞく森山隆氏の所説は、いずれも二十九年度(新・旧制)の卒業論文に手を加えて頂いたもの、前者は人麻呂の修辭を口誦的修辭と記載文学的修辭の二面から考察され、後者は芭蕉の自然について郷土的風土に対する感傷を打たれた。大内初夫氏の九州野坡門の研出さ

て作ある。鶴久氏は万葉の「天露之」をアマガラヒ(之は助字)と訓む新説を発表され、東秀吉氏又「見るからに」、「聞くからに」の特殊な現代的用法に着目された。すべて若い息吹きに通つたものばかりであるだけに、それ／＼多くの問題を孕む野心作であり、討論の余地も多いであらう。隔意なき御批判をお待ちする。

○ 第二号はこの様な姿でともかく滑り出した。これから以後の運行為大切であらう。新旧会員各位の絶えざる御支援と御鞭撻をお願いする次第。経営その他に御意見や御異議のおありのばあは遠慮なくお聞かせ願いたい。そして次号以下の玉稿(八月末日締切)を鶴首してお待ちする。将来は隔月発行までに発展させて、次号の予告が出来るぐらいにしたい。意気込みではある。

○ 花もいつのまにか散り過ぎて、早くも

松囃のさゞめきが窓外から聞こえ、夏も間近かな博多の街々をいやが上らうき立たせている。ドンタクにつきものの雨が上れば、学内の松林にやがてニーニー蟬が鳴き初めることであらう。各位の御健康と御活躍を祈りながら擱筆する。

(春日記)

第三号原稿募集

締切 八月三十一日

(四百字語原稿用紙二十枚)

前後とする)

十月初旬発行予定